

IACR 2011年年次学術総会に参加して①

祖父江 友孝 平成23年度専門委員

国立がん研究センター がん統計研究部 部長

本年のIACR 学術総会は、インド洋の島国モーリシャスで行われました。10/11-13に2日半の本会議が行われ、一日前の10/10に研修コース(トレンド解析とCanreg5の2コース)と理事会、一日後の10/14には、アフリカがん登録協議会の地域ネットワーク会合が行われるという構成でした。

日本からは、津熊、井岡、宮代、伊藤、片山、猿木、松田、片野田、祖父江の計9人が参加しました。大阪組はドバイ経由、猿木先生・片野田・祖父江はシンガポール経由、松田はパリ経由、片山先生はロンドン経由でしたが、モーリシャス発着の便が週に数便と限られるため、比較的長期の滞在になりました(祖父江の場合は現地6泊)。

モーリシャスは人口130万人、面積2000平方キロ(東京都と大阪府の間くらい)の島国で、10月の気候は、泳ぐにはやや気温が低いかな(日本よりはやや暖かい)という感じでした。会場のインターコンチネンタルホテルは完全なリゾートホテルで、目の前にプライベートビーチあり、プールありという場所でした。

初日のオープニングには、首相がこられてあいさつをし、2日目の懇親会には厚生大臣が出席されてホストを務めるという、国あげでの開催でした。横浜に続きIACRの単独開催であり、プログラムとしても、実施責任者であったモーリシャスがん登録のDr. Manrajiが「モーリシャスのがん」と題した講演を行ったり、「アフリカのがん」のセッションが設けられるなど、主催者の顔の見える、いい感じの会合でした。Dr. Manrajiから「全て横浜の通りに行なったが何か不都合はないか」と言われた時には、やや嬉しい気持ちになりました。

2日半で、7つの基調講演、37題の口演(日本からは片野田、祖父江)、73題のポスターが発表され、遠隔地での開催としては、まずまずの参加者だったと思います。アジアからの参加者で目立ったのが韓国で、がん登録実務担当者が10数人参加していました。恒例のポスター賞には、伊藤ゆり先生が選ばれて常連の風格を醸し出していました。10/9に隣のホテルが火事になるアクシデントがありましたが、私自身は滞在中、大阪マラソン(10/30)に備えて、ホテル周辺のサウキビ畑沿いの道で朝夕トレーニングができ、お陰様で3時間48分のタイムで完走することができました。

来年は、9月17-19日にアイルランドのコークで開催されます。皆さん奮って参加しましょう。

ホテル周りのサウキビ畑▶



IACR 2011年年次学術総会に参加して②

伊藤 ゆり

大阪府立成人病センター がん予防情報センター
疫学予防課 研究員

2011年10月にモーリシャスにおいて開催された国際がん登録学会に参加しました。この学会へは2003年のハワイでの開催以来、北京、ウガンダ、そして昨年の横浜と5回目の参加でした。がん登録に携わる研究者が世界中から一堂に会し、意見交換できる貴重な機会です。日本からモーリシャスへの移動は約1日かかりました。気候がよく、美しいビーチを横目に眺めつつ、学会に参加しました。学会前日に行われたタイムトレンドのプレコースではがん罹患率・死亡率のトレンドについて、軸を診断年、年齢、出生年など、さまざまな方向からデータをまとめ、解釈する方法やAPCモデル・将来推計の方法などを学びました。学術総会では、がん登録資料からみたがん対策の成果についての報告も多く、わが国のがん対策評価においてもがん登録資料の活用がますます重要であることを実感しました。また、英国等ではデータリンケージによる研究も進んでおり、我が国においても実現したいと思いました。

私は昨年の横浜で報告した大腸がん患者の治癒割合の推移の研究を発展させ、治癒割合の向上により避けられた死亡者数を推計したものをポスターで報告しました。早期診断や医療技術の進歩により、1975年から2000年までの間で約30%治癒割合が向上し、わが国では約2万人の死亡を避けることができたことと推計しました。モデルのあてはまりの悪さなど、課題はありましたが、本報告は昨年のEnrico Anglesio Awardsに引き続き、Poster Awardをいただきました。数多くの優れたポスター発表の中で、このように貴重な賞をいただくことができ、光栄に思っています。ご指導賜りました先生方にこの場をお借りしまして、御礼申し上げます。来年のIACR学術集会は9月にアイルランドのコークでの開催が決まっています。引き続き、地域がん登録資料を用いた研究報告ができるよう、頑張りたいと思います。

▶ポートルイス市内観光



隣のホテル火災で▶
足止めされて休憩中

